

## 台湾國立清華大學 - 大阪大学 自然科学学生交流活動 2011 に参加して



若 者

長 江 多 恵 子\*

What I have learned through  
National Tsing Hua University-Osaka University  
Life Science Student Activity Fair 2011

Key Words : International interaction activity

我が大阪大学理学研究科には、荻原哲教授の統率のもと様々な海外との学生交流の場が設けられている。その中の一つ、『台湾國立清華大學 - 大阪大学 Life Science Student Activity Fair 2011』に今年5月に参加した。この国際交流会はまだ設立されて新しく、2006年に清華大學側の Initiative 事業として始まったものである。2009年からは毎年5月に数日間のプログラムを組み、2校の間で学生の訪問交流が行われてきた。今年は清華大學側の学生8名と教授2名を大阪大学へお迎えした。今回初めてこのイベントに携わり、多くの inspiration と貴重な経験を得たので紹介しようと思う。

台湾國立清華大學は台湾でトップ4に入るレベルの高さと、今年で生誕100周年という長い伝統をもった立派な大学である。清華大學でこの記念すべき年を祝って作成されたという、すばらしく優美な切手集（金色の光の中に輝く清華大學の建物のモチーフ）と、台湾ヒノキのキーホルダー（ここにも清華大學が焼き印されている）をプレゼントしてもらった。切手は一生使いたくないほどの美しさで、もらえたのが日本でよかった。（まちがって使いたくても使えない。）キーホルダーからは清々しいヒノキの香りがただよう。清華大學というその名に実にふさわしい記念品だった。

この交流会において毎年恒例で行われているメイン行事がシンポジウムであり、各大学から8名ほどの学生がそれぞれの研究内容を紹介・発表する。私は今回の交流会には発表者としてではなく、世話役長として参加し、学生リーダーという立派な役名をいただいていた。そのため、当日は発表する前の緊張もなく、みんなの研究発表を大いに楽しんで聞くことができた。理学研究科の学生には全員自由に参加するよう連絡がなされていたが、大学院生ともなると自分の研究が優先事項となる。そこを私は世話役として参加するという大義があったため、正々堂々と交流会に専念することができた。何とも嬉しいお役目をいただいたものである。

このシンポジウムは、自然生物科学専攻の学生のみで構成されているものの、自然生物科学といってもその範囲は広大である。研究が深くなればなるほど個人の領有する範囲が狭まる、つまり専門的になっていく、というのが研究世界の自然の摂理である（と半人前の私は認識している）。私は今回世話役として、このシンポジウムを始め交流会全体の行程を組んだのだが、一番大変だったのがシンポジウムのプログラムの作成だった。今回のシンポジウムでは、実際の研究発表会や学会で見られるように、研究テーマが同分野の発表者ごとにセッション分けして発表してもらうこと、なおかつ清華大學と大阪大学の学生が交互に話すようにプログラムを作成することになっていた。困ったことに、まず私の学術知識の範囲自体が非常に狭い。（半人前であるのでしかたない。）発表者には、これも実際の学会発表時と同じように、発表内容の要旨を前以て送ってもらっていた。要旨だから内容が簡単にまとめてある。長々と研究内容を何本も読まなくていいのは助かった。分野ごとのキーワードも大体把握はしている。しか



\*Taeko NAGAE

1979年4月生  
アメリカウイスコンシン大学マディソン校  
Dep. of Letters & Science 生物学専攻  
(2005年)  
現在、大阪大学 大学院理学研究科 生  
物科学専攻 博士前期課程 (M2)  
TEL : 06-6879-8299  
FAX : 06-6879-8298  
E-mail : tsoma@biken.osaka-u.ac.jp

し、あまり知らない分野の内容は何度読んでもなかなか頭にすんなり入ってきてはくれない。何度も何度も全要旨を読み直した。さらには内容が掴めても、研究テーマごとのグループにちょうど良い人数ずつ分かれてくれるわけではない。グループ2つ(あるいは3つ)にまたがるテーマの人もいる。やっと分けられた、と思っても、清華大学・大阪大学とうまく交互に並べられない。・・・このような困難をようやく乗り越えたのは交流会要項作成の締め切り日、本番の1週間前。発表者の学生達はおそらくそこからスライドの練り直しや発表練習(しかも英語で)で大わらわだっと思ったが、私の業務はその後は下り坂。その他の小業務をこなす傍ら、清華大学のメンバーとの出会いを待ち望みテンションが上がって行く日々だった。何ともありがたいポジションをいただいたものである。ただこの浮かれたラストスパート期間にも、世話役をすること、一つの行事を取り仕切ることはいかに多くのことに気を配らなければならないかということをつくづく体感した。

シンポジウム当日。2つの異文化を背景を持つ学生達の多種多様な研究発表を聞くのは、期待通りたいへん興味深いものだった。しかしそんななかでも最も印象に残っている点は、『シンポジウムでの研究発表はシンポジウム用に構成されたものが成功を修める』という事実だった。今回のイベントの一環として、最優秀発表者には授賞式で賞状と記念品の贈与も行われた。清華大学の最優秀発表者を大阪大学側が、大阪大学の最優秀発表者を清華大学側がそれぞれ投票で選出したのだが、受賞したのはどちらの大学の発表者においても、自分の研究内容を分か



授与式の様子

りやすく伝えられ、かつ英語力も高い人たちだった。どの発表者ももちろん研究テーマ・内容はすばらしい。しかし、それを専門分野外の人たちにもわかる言葉で噛み砕いて内容を説明でき、さらに聞き手に面白いと思わせられるプレゼンテーションこそが、多くの票を勝ち取っていた。そしてそこには、相手に言いたいことが伝えられるだけの英語力(主に発音)も大きく関与していた。どれだけ相手に分かってもらえるか、分かるように伝えることができるか、というコミュニケーション能力の大切さを再認識させられる経験だった。

2日目は外部研究機関見学として、JT生命誌研究館(大阪)と理化学研究所CDB(兵庫)の2カ所を回った。普段は訪れる機会のないこれらの研究機関で、特別に研究内容をプレゼンテーションしてもらったり、研究室内部も案内してもらったりと、実り多い1日であった。2カ所の合間には昼食として、



理化学研究所 CDB 前にて

和食レストランで日本そば、寿司、茶わん蒸し、天ぷら、和風デザートが付いた御膳を前以て予約していたのだが、清華大学のみんなは「あれが食べられない」「何かよく知らないものは食べたくない」などとは言わず楽しんで食事をしていて、そのオープンさや柔軟さ・積極性にとっても親しみを感じた。中には御膳の他にカツ丼やかき氷あんみつを注文して満喫している清華大学のメンバーもいて、その食欲には驚かされた。なにより日本食を気に入ってもらえたことが大変嬉しかった。

1日目のシンポジウムの後はウェルカムパーティー、そして2日目の研究機関見学の後は早くもお別れ会



2日目のお別れ会にて

と、慌ただしく濃密な時間が流れ去って行った。(何人かのメンバーは3日目には台湾へ帰国することになっていたからだ。)やはりお酒の場は盛り上がる。日本人も宴会は好きだが、台湾人もそこは同じ。国境などない。ウェルカムパーティーではにぎり寿司、串カツ、オードブルなどが並び、お別れ会ではたこ焼き&お好み焼きパーティーが功を奏した。たこ焼きは、少し日本の本家本元のものとは異なるらしいが、台湾でも人気があって食べられているとのことだ。みんな順番に作ってみたり、日本語を習うそばから使ってみたりしてたいへん盛り上がった。

台湾の人たちはおおむね親日家が多いと聞いてはいたが、みんな本当に気さくで心安く、あっという間に打ち解けた。この、言葉の壁を越えて生まれる親密さのあり方が私はものすごく好きだ。お互いに伝えようと努め、たとえ会話のレベルは高くないに

しても、伝わる内容・気持ちの深さは、同じ母国語を話すもの同士でもなかなか得られないほどだと思う。たった2日余りの短い時間であったが、最後の晩はお互いに名残惜しく、お別れを言い合ったり写真を撮ったりするのにどれだけの時間を費やしただろう。彼らの宿泊先のホテルには門限があったのだが、着いたときには危うく時間ギリギリだったと聞いた。私達、大阪大学側からは手みやげとして大阪大学のロゴ入りのマグカップを用意していた。包装されたマグカップに、一人ずつの名前とメッセージを書いて贈ったのだが、私達の気持ちも届いたのだろうか。

今回は台湾の学生達との素晴らしい出会いを体験したが、このような国際交流の機会が、さらに多くの学生にも身近に与えられることを心から祈る。

